

韓國人と諧謔

張德順著

梁民基・河村光雅訳



素人社

韓國人と諧謔

張德順著

梁民基・河村光雅訳



素人社

訳者略歴

張徳順著

韓国人と諧謔

梁民基（ヤン ミンギ）

一九三五年名古屋市中に生まれる。編訳書に

『仮面劇とマダン劇』（晶文社）、『図解・韓
国の伝統人形芝居 コクトゥカクシノルム』
（現代人形劇センター）、『韓国マダン劇集・
緑豆の花』（素人社）。

河村光雅（かわむら みつまさ）

一九六二年、豊中市に生まれる。京都大学
大学院文学研究科修士課程修了（言語学）。

一九八九年九月十五日 第一刷発行

訳者——梁民基・河村光雅

装幀——倉本修

編集人——沢田都仁

発行所——素人社

〒六〇六 京都市左京区下鴨北野々神町31

振替 京都三二六六六九

電話（〇七五）七一一七五二一

印刷——法文社

製本——株式会社修明社

定価——一、六〇〇円

序

一九八六年八月に、私は定年で退官した。四十年近く大学で、わが国の古典文学を講義しながら拾い集めた落穂を選び出してまとめたのが、この『韓国人と諧謔』という小冊子である。

その間、専門的な著書や随筆集も幾冊が出した。しかし、こういった書物には、いわゆる面白さが無い。文学を勉強しているといいながら、興味のわく本を一冊も出せなかった自分を、いつもはがゆく思ってきた。才能がなくて小説も詩も書けない者が、どうして面白い本を書くことなぞできるか？

ところが、韓国の風俗を勉強するうちに、韓国的な人間像と、韓国的な笑いなどに関心を抱くようになってから、あいまいまにこの方面の資料を集めておくようになった。そうした時に、『鮮京』広報部の朴東圭君がひょっこり訪ねてきて、『韓国人』について続き物で書いてくれとのことだった。で、約二年間書いてきたが、これは朴君の誠意と根気づよい督促の賜物である。東圭君に感謝する。

次の「諧謔」は、『韓国日報』からすすめられるがまさに一年間「行廊房噺」という題目で連載した、短いあれこれの話を集めたものである。これは、「韓国の諧謔」という論攷を書きながら得た落穂である。

私と同じ六十代は、笑いを失ってしまった世代だ。日帝末期、六・二五、四・一九、五・一六、等々、ひき続く激動を身をもって経験するなかで心置きなく破顔大笑する余裕がなかった。そのためいつも顔をしかめて暮らしてきた。六十代の同志たちよ!! この本を読み、失ってしまった笑いをとり戻そう。そして、粹で余裕綽々のわが先祖の「韓国人」を再吟味してごらんなされ。定年を迎えて、同年輩に捧げる私の贈り物である。

ii

一八八六年十一月

著者 識

韓國人と諧謔

目次

序文 i

第一部 韓国人

檀君 2

東明王——高句麗建国の英雄—— 6

広開土王——大陸を支配した英雄—— 10

最初の殉教者、異次頓 14

高句麗の安藏王 19

聖地（印度）を巡礼した慧超 24

善徳女王 29

大乘仏教の大師、元曉 33

絶世の美人、水路夫人 37

虎新婦 41

棄て児 47

黄政丞と孟政丞 52

洪允成の野話 57

超能力の異人、田禹治 62

理想的な韓国の主婦像 67

風流男児、林白湖 72

副室文学の代表、李玉峰 77

馬鹿の朴三虫 82

義侠男児、洪純彦	87
時代の反逆児、許筠	92
李光庭と五人の乙女	98
鄭起龍	104
扶安妓生、李梅窓	109
緑林豪客	115
昼寝ばかりしている婿	120
「芝峰伝」のヒューマニズム	125
暗行御史、朴文秀	130
大らかさ、粹、人間愛	135
名判官、李書九	140
乞食ヒューマニスト広文	145
酒と画の狂生たち	150
放浪詩人、金サッカッ	155
鳳伊・金先達の諧謔	161
韓国の奇人、金進士	168
先祖たちの知恵	172
鄭寿銅の逸話	177
老沢官と北京の乞食	182
大金持ち、黄長者と慶尚監司	187
全東屹伝——文人と武人の友情——	192

第二部 行廊房噺

無題	198
馬鹿と牛	200
雷	203
ただ一度だけ	206
ああもできずこうもできず	208
蝙蝠と鬼神	210
ルーツ打令	212
疵吝考妣	214
剃髪	216
ラビとゴルフ	218
本物とにせ物	220
引絶味と芥菹	222
東家食 西家宿	224
三不如	226
興夫の創案	228
不言短処	230
曲礼も礼	232
両班と犬	235
位牌と小犬	237
閻魔大王の判決	239

田舎両班	242
巨人説話	245
耳の聞こえない老婆	248
竹管児	251
老婆の変身	253
鰥夫と寡婦	255
ある泥棒	258
老狐と妖魅	261
せっかちな婿	263
ひげ打令	265
かさざぎと狐	267
道士のしくじり	269
漢字の含蓄性	271
壺売りの九九	273
ベテンの名人	275
虱と犬の比喻	278
訳注	281
資料	288
朝鮮王朝時代の官制について	
朝鮮王朝の歴代王	
あとがき	291

第一部

韩国人

檀^{タン} 君^{くん}

歴史の中の人物というのは、歴史的人物として実在していた人が、いつ生まれいつ死に、どんな事をしたという単なる年譜的な話だけではない、もっと興味のそそられる、あまり知られていないあれこれの逸話をも意味する。

人物には「歴史の中の人物」もいるが、その他に「神話の中の人物」もあり、「伝説の中の人物」もある。神話は、神々の活動であるから神が中心で、人間はあまり登場しない。半神半人や半獣半人などの怪物（？）もいるが、歴史が人間に移っていくにつれ神やこうした怪物は姿を消し、人間中心になる。伝説上の人物もほぼ歴史的な人物と同じであることもあるが、歴史にいなかった人が伝説の主人公になる場合もある。また、歴史的人物といっても伝説化される過程で非現実的なものに誇張・潤色され、史実以上に英雄化されたり愚か者にされたりもする。

私は「歴史の中の人物」を書いてほしいと頼まれた。神話の中の人物のように神聖視されていたり、伝説の中の人のように誇張・興味本位の人物でなく、歴史的事実に基づいた話、という意味なのだろう。しかし、ここでは、みながよく知っている話は避けて、断片的で、あまり知られていない話を主に扱ってみようと思う。もちろん、面白くて、かつ私たちに利益にもなるような逸話や人間肯定の美談・佳話をテーマにしようと思う。

檀君は歴史的人物なのか、神話の中の存在なのかという問題については、わが国の学界で論議されている。私はいま、それについて語る余裕はないが、わが国の歴史から人物を挙げるとすれば、最初の人物である檀君を語らないわけにはいかない。彼は神話時代の主人公でありながら、人間中心の歴史時代の最初の人物であるからだ。そして、どの民族も開国神話は持っているが、わが国の檀君神話には他の国と異なる特異な点がある。すなわち、韓国的な特性があり、したがって「韓国人」の原初的存在にふさわしく宇宙的な総合性を帯びている。そうした意味からこの文のしょっぱなに、わが国の歴史における最初の人物である檀君をとり挙げたのである。

人間が生まれる前の太初の世界は神が支配し、また神々だけが住んでいた。ところが、この神々は人間を意識し、人間世界に憧れをもつようになる。天を支配する神である桓因フナインの庶子に桓雄フナコがいた。ここで庶子というのは長男でないという意味だ（長男は天界を引き継ぐだろう）。桓雄という神は常々地上、すなわち人間界を築きたがっていた。そこで父にその志を告げて許しを得たのである。

雄は三人の参謀（雨、風、雲の神）と数千名の臣下を率いて人間界に下り、事業にとりかかった。その事業とは人間社会の基礎を整えることだったのだらう。ところが地上の動物たちはみな人間になりたがった。桓雄はその願いをすべて聞き入れてやるわけにはいかず、熊と虎にだけ人間化の使命を与えた。しかし人間になるということはなまやさしいことではないので、その修練をきびしく言い渡し、万一失敗すれば永遠に人間になれないことを肝に銘じさせた。この修練に虎は失敗し、熊は耐え抜いて人（女人）になるのに成功した。この人間化の修練でもっとも難しいのは暗黒の中

での禁忌生活だったろう。動物が人になるには、まずは動物性をとり除くと同時に、人間性を育成しなければならぬ。この過程で重要なのが光明と暗黒、強さと弱さの反復と調和だと思う。

桓雄神は光明である。彼は、雨、雲、風の神を率いていることからみても太陽神であつたらうから、つまり光明である。この光明とその反対の暗黒の反復は宇宙の原理なのだ。そして、動物性の弱化和人間性の強化が繰り返されつつ人間が形成されるわけである。

また、修練中に蓬トモとニンニクを食べなければならぬというのも重要な意義をもっている。これらは植物を代表しながらも、人間ともっとも近い距離にある。蓬は昔から、「人」の意味をもっていた。蓬は民俗でも民間医療でも多く用いられた。また、ニンニクも人にとつてなくてはならぬ大切なものというだけでなく、漢方医学においてはあらゆる毒性と邪気を除去する特效剤として使われてきた。だから人間形成において、人の形に似ていて人のためにもなる植物である蓬と、獣性除去に効能のあるニンニクが登場するのは、実に合理的な方法なのだ。さらに蓬は女性と関係が深い薬材である。だから熊は女人に昇華したのだ。

この女人を、便宜上熊女クニメと呼ぶ。この熊女は神壇樹の下に祭壇を築き、懷妊を祈った。これに応えて桓雄神が男に化して熊女を懷妊させ、こうして生まれたのが檀君である。

人間檀君を誕生させた神々は、神話から退場する。そして、人間社会の活動が始まり、檀君が主人公として登場することになる。

檀君は韓国人であり、私たちの祖先である。それを象徴する要素が神話にたくさん現われているが、そのうちのひとつが「三」という数字だ。

天の神である桓因は息子の雄チョンブイに天符印を三つ与えて人間界に下らせ、雄は風、雨、雲の三神を彼の幕僚とした。天符印とは神の象徴であり、三つとは三世界を称するものだと考えられる。すなわち天、地、そして人間。この三世界の統治を意味する象徴なのである。わが民族はこの「三」を完全数と考えて神聖視してきたが、それはすでに檀君の時代に始まったことのようにある。檀君の話で「三」の数はその他にもある。雄が天上から太白山頂に下ってきたとき、部下三千を率いておよそ三百六十余の人間の活動を管掌した。熊と虎は蓬とニンニクを食べて三十七日を忌み、熊だけ人間になったのである。

檀君神話は、神と人間の共同事業として朝鮮という国を建てたのだが、その段階は「天」を志した神(因)――地上を志した神(雄)――人間(檀君)――というふうに、神――人間への経過がはっきり見てとれる。そして活動の舞台は天上から地上にまたがっており、三千余の神々が太白山の上に神市を開き、神政を始めたのである。檀君はこうした流れのなかで、森羅万象の助けを受けて生まれ最初の人間だったのである。

東明^{トミン} 明王^{ミョウワン}——高句麗建国の英雄——

東明王は神話的な存在である。と同時に、彼はれっきとした人間であつた。父は天帝の子孫であり母は水神（河伯）の娘であるから、確かに彼の両親は神話の世界に属する存在だ。彼らのあいだに生まれたのだから、東明王は神話的な人間と言わざるをえない。しかし、彼は神ではなく明らかに人間であり、同時にこのような神聖性をもつ非凡な人間、つまり歴史の中の人物なのだ。

解慕漱^{ヘモソク}は天帝の息子である。したがって神の資格をもつたまま人間の世を治めた。そのうちに水の神である河伯^{ヘバク}の娘、柳花^{ユイカ}と親しくなつた。河伯には三人の娘（柳花、萱花^{アサシタ}、葦花^{イブナ}）がいたけれども、柳花だけが縁あつてか、解慕漱と逢い引きをする機会があつた。ところが河伯と解慕漱はこの結婚問題で決闘をするまでになり、柳花は父から絶縁され鴨緑江の川岸に捨てられた。解慕漱はひとり天に上つていつてしまった。

川岸に捨てられた柳花は北夫余の金蛙王^{キムワラワン}に発見された。金蛙王はこの女人が解慕漱の妻であることを知つて丁重に扱い、自分の宮殿の一室に保護した。寂しい部屋に幽閉された柳花に、日の光が窓の隙間を通して入ってきた。柳花はなぜかその光を嫌つて逃げまわつたが、とうとう柳花は腹を照らされてしまった。柳花は懐妊し、しばらくたつて出産した。産んでみると、五升入りの水がめほどもある卵だつた。不思議な出来事だつた。金蛙王は、人が卵を産むのを不吉に思い、それを宮

中に置かせないようにした。

最初、卵は厩うまやに捨てられた。馬たちは卵を避けて踏まなかった。次に、卵を山の中に捨てた。鳥たちがやってきて、羽で卵を保護した。そのみか、卵からは燦然と光が輝きはじめた。王は常ならぬことだと不審に思い、卵をふたたび母親の柳花に返してやった。その卵から生まれた子がすなわち東明王であるが、生まれて数カ月も経たずして言葉を喋った。

「お母さん、蠅がうるさくて眠れません。弓をひとつ作ってください」と言うので、母は弓矢を作った。

幼な児は弓で蠅を射落とした。百発百中だった。夫余の言葉で弓の名手を朱蒙チュモン（モンゴル語で、Somo, Sumo は弓矢という意味、朱蒙はその音転写ではないか？）と言ったが、それ以来この子を「朱蒙」と呼ぶようになった。朱蒙は大人に成長していった。時がたつにつれ彼は心身ともにたくましく、聡明になっていた。

金蛙王には七人の息子がいた。みな朱蒙とは仲が良かったのだが、朱蒙が並はずれて抜きんでいるのを妬み始めた。朱蒙は母の柳氏と相談し、北夫余を脱出しようと決心した。七人の王子がなにか企む前に、出ていくことにしたのだ。そのころ朱蒙は王の牧場で馬に餌を与える役目を受け持っていた。で、母といっしょに駿馬を選んで抜け出した。生死をともしする三人の同志と共に。

しかし、母と妻の礼氏レイはそのまま北方に残していった（この時礼氏は子どもを孕んでいた。この子どもが後に高句麗の第二代王となる瑠璃ルリである）。

朱蒙と三人の同志は南方に向かって馬を走らせた。蓋斯水ゲイサス（鴨緑江の東北）が前を塞ぎ、舟もな